

平成 28 年度第 2 回横浜環境活動賞審査委員会 会議録	
日 時	平成 29 年 2 月 23 日 (木) 13 時 00 分～16 時 40 分
開 催 場 所	関内中央ビル 10 階大会議室
出 席 者	戸川孝則委員長、篠木幹子副委員長、磯崎保和委員、川崎あや委員、北村亘委員、 為崎緑委員、山口正宏委員
欠 席 者	なし
開 催 形 態	公開 (傍聴者なし)
議 題	1 応募者プレゼンテーション及び審査 2 生物多様性特別賞審査 3 第 24 回横浜環境活動賞受賞候補者の決定
決 定 事 項	第 24 回横浜環境活動賞受賞候補者は、次のとおりとする。 1 市民の部 (1) 大賞 特定非営利活動法人 茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会 (2) 実践賞 阿部昭雄 一般社団法人 大岡川川の駅運営委員会 関ヶ谷市民の森愛護会 平戸永谷川水辺愛護会 横浜温暖化防止推進員会議 特定非営利活動法人 楽竹会 2 企業の部 (1) 大賞 株式会社よこはまグリーンピース (2) 実践賞 カーボンフリーコンサルティング株式会社 株式会社東芝ストレージ&デバイスソリューション社 大船分室 3 児童・生徒・学生の部 (1) 大賞 フェリス女学院大学 エコキャンパス研究会 (2) 実践賞 横浜市立三ツ沢小学校 4 生物多様性特別賞 特定非営利活動法人 茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会
議 事	1 応募者プレゼンテーション及び審査 (戸川委員長) プレゼンテーション及び審査の進め方について、事務局から説明をお願いします。 (事務局) 説明 (戸川委員長) 今の説明に対し、審査委員の皆様、応募者の皆様、何かご質問があるでしょうか。ないようですので、プレゼンテーションを始めます。

(1) 市民の部

阿部昭雄

<プレゼンテーション>

私が自然環境について活動を始めてから、今年で20年です。定年が20年前で、今年ちょうど80歳になります。定年の頃に、緑区で行われた自然教室というものがきっかけで、出身も農学部で興味があったため、それからずっと緑に関わってきました。そんな中、緑区の賀詞交歓会で、竹山小学校の校長先生から、学校で草履づくりをりたいのですが、教えていただくことはできますか、と聞かれました。私は実家が農家で、子どもの頃やっていたことがあるので、それをきっかけに学校で教えることになりました。最初の年は、藁をもらってきて、それを使って作りました。そして平成25年度からは、米作りから草履づくりまで、一連の活動として取り組もうということになり、田んぼづくりが始まりました。それ以降、田起こしから始まり、脱穀、精米、草履づくり、感謝祭という一連の活動を毎年続けています。鴨居小学校では、20年ほど前から遠足支援として、ドングリ拾いや、この木は何か、草は何か、という質問に答えたりしています。注目してもらいたいところは、自然体験は、大人になってからでは遅いので、子どものうちから、自然に対する愛着、大切さについて教育を実践する。これを目標としていることです。

<質疑応答>

(為崎委員) 子どもを自然にふれさせることを大切にしているということですが、自然とふれあうことが、楽しいで終わらずに、環境が大切だということを実感できるように工夫されていることがあれば教えてください。

(応募者) 例えば、子どもたちが自然の中で虫を見つけたら、虫を小鳥が食べて、その小鳥を大きい生き物が食べる話ですとか、糞の中に種があって、芽が出てくるとか、蝶でしたら、この木があれば、この蝶が来るなどというように、生き物のつながりを伝えるようにしています。

(川崎委員) 市民の森愛護会の会長さんでいらっしゃるということですが、会の仲間が小学校の活動に賛同して、一緒に参加することはありますか。

(応募者) あります。一人ではできないので、例えば遠足だったら、会員の中から希望者を募って、5人以上一緒に行ってもらっています。草履づくりも、一緒にやってもらっている人がいます。

(山口委員) 応募資料の中に、継続するために後継者の確保と指導をしていくとありますが、目途は立っているのでしょうか。

(応募者) 市民の森愛護会は、78歳が平均年齢なので、新たに若い人を誘って仲間に入ってもらい、植物の名前や草履づくりなどを教えています。

(北村委員) 今の話と関連しますが、平均年齢78歳の中で若い人は何歳ぐらいなのでしょう。

(応募者) 自治会から入会してもらった42歳が最年少です。早速ホームページの担当になってもらっています。

(戸川委員長) 子どもたちの変化をどのようなところで感じますか。

(応募者) 今まで自然に対する意識がなかったのが、「これは何の木ですか」「この草は食べられますか」など、市民の森などで聞いてくるようになりました。

(戸川委員長)子どもたちと日常的にコミュニケーションをとっているということでしょうか。

(応募者) そうです。「阿部ちゃん」と呼ばれていて、よく声をかけられます。

(為崎委員) 応募された理由と、受賞した場合、その成果で何をしたいのか教えてください。

(応募者) もっと活動をしていきたいので、賞をもらうことで、依頼があるのではないかと期待しています。

<意見交換>

(為崎委員) 個人の応募者の場合、継続性をどのように考えるかが難しいと思うのですが、いかがでしょうか。

(北村委員) 今後どのぐらい活動していけるかという点で言えば、若い方が育っているという印象は受けました。

(川崎委員) 個人として継続できるかどうかの一つ、後継者を育てるのも一つ、そしてもう一つは、学校がこのように地域の人と組めるということを経験として積んでもらうことによって、今後生かすことができるということも継続性の一つと考えられるのではないのでしょうか。

(篠木委員) 継続性や他の市民団体との関わりとして、個人的に期待したいことは、個人としての活動を超え、小学校も含めて、多くの人を巻き込むことです。そうすれば、継続性も期待でき、活動も広がるのではないかと思います。

(山口委員) 1人でこれだけのことをやっているというのは、とても評価できると思います。個人の継続性の問題というより、このような草の根運動を評価することで、横浜環境活動賞は個人でも応募していいという、模範になるケースだと思います。その点を評価するとよいのではないのでしょうか。

<採点>

一般社団法人 大岡川川の駅運営委員会

<プレゼンテーション>

大岡川川の駅運営委員会は、今年で10年目を迎え、11年目に入ります。当初は桜まつりをきっかけに、地元の方々を中心に、大岡川をもっときれいにして、利活用し、地域の活性化につなげられないか、という発想により、10年前に県に申請し、桜栈橋をつくってもらいました。その際に、栈橋の管理は地元で行いたいと県に持ち掛け、管理を行う団体として発足しました。一昨年、一般社団法人化するに際し、横浜市の社会実験として、鍵の管理など栈橋の施設管理と、清掃の活動を中心に行うようになり、今にいたっています。一般社団法人になってから、清掃部を立ち上げ、毎月清掃を行っており、港内で活動をしている横浜SUP倶楽部や水辺荘などの団体が積極的に清掃活動をしています。先週も行ったばかりですが、大岡川、中村川で100kg以上の陸上ごみと水上ごみを回収しました。水上ごみの方が多く、中村川で55kg、SUPによる回収は30kgにのぼります。たばこの吸い殻も1,500本ほどありました。このような活動については、SNSを使って情報を公開しています。ごみが多く、危険物などもあり、地域の環境が気になる中で、子どもたちに川の良さを知ってもらうためEボートによる体験等を継続して行っており、またワカメの育成や貝の放流など

の活動も行い、環境活動に取り組んでいます。

<質疑応答>

(為崎委員) 委員会の構成団体を見ると、水上交通の団体と、環境保全の団体がいるように見えますが、メンバー全ての方が、環境保全を重視しているのでしょうか。

(応募者) 清掃部分と、環境改善を中心に進めていこうと考えています。先日、水質検査を行う企業も会員になっていただき、源流域、中流域、下流域は長者町と中村川の計4か所で水質検査を無償で行っています。今後、ワカメを植えている場所とそうでない場所どう水質が変わるのかなどについて調べていきたいと思っています。現在も見たい目はきれいですが、窒素、リンの成分が多くなっています。また、大岡川は、上流はとてもきれいです、下流域が汚いのは、横浜港内のごみが潮の干満で上がって、汚しているからです。その裏付けを取っていききたいと思っています。

(篠木委員) 活動が長く続くと、だんだん人が集まらなくなったり、だれたりということがあると思いますが、このようにたくさん活動を行って、多くの人に参加してもらうためにどのような工夫をしているのか教えてください。また、資金について、厳しい状況に見えますが、どのような工夫をしていく予定か教えてください。

(応募者) 連携に関して言えば、当初は地元の方々のEボートを活用した活動が主体でした。しかし昨年度、関内関外地区活性化委員会からお声掛けいただいて、中村川の元町、石川町との会合により新しい栈橋をつくる話もでており、そちらの町内会の方との連携も広がっています。その中から、参加者が増えたり、チームが作られたりもしています。予算は、ほとんどがボランティアですが、所属している団体それぞれは、川を使ってのビジネス、例えばSUPだったら、スクール開催などによって、活動資金を調達しています。

(北村委員) 環境の中でどこに注目しているか、最初のきっかけと違って、なぜ環境に注目するようになったのか教えてください。

(応募者) 横浜市はきれいにしようと取り組んできていて、今、確かに川の水は、見た目はきれいになりました。以前はごみの回収船がありましたが、今は回収船がないため、ごみは溜まってしまいます。皆さんに使ってもらいたい、遊んでもらいたいと思うと、ごみをどうにかしたい、水質をよくしたい、という意識が出てきました。そして、きれいにしていくための活動をするようになりました。

<意見交換>

(戸川委員長) 実際SNSを見て、吸い殻のことを知り、そういう情報は拾うことが難しいので、貴重だと思いました。最初は違う目的で集まったけれど、次第に環境活動に取り組み始めたことも、とても面白いと思いました。

(北村委員) まだまだこれから期待できる団体だと思っています。生物多様性の観点から言いますと、いろいろな生物多様性に関する取組をして、それが実際どのように川をきれいにしていくのかという点が、これからということでしたので、その結果が見られると評価しやすかったと思います。

(為崎委員) 構成団体の全てが、環境活動に賛同しているのかどうかについて質問したのは、申請書自体にあまり環境に関する内容がなく、添付資料に環境や生物多

様性に関する取組が載っていたので、これが本当に会全体の意識となっているのか確認したかったからです。代表は、熱く語っていただきましたが、会全体として環境活動への意識の共有があるということが、申請書から明らかになるとよかったですと思います。

<採点>

一般社団法人 かんきょうデザインプロジェクト

<プレゼンテーション>

私たちは主に中学生・高校生を対象にプログラムを展開している団体です。なるべく五感で楽しんで、情報生産力の向上と新しい価値観を発見していけるようなプログラムということを考え、組み立てています。成果としては、新たな関心層の創出、学び、意欲の向上、将来ビジョンを描ける人の獲得、情報発信、コミュニケーション力向上と考えています。言葉自体は強烈ですが、そのほんの一部をサポートできればと考えています。上位目標としては、環境啓発活動に新たな変化をもたらす主体者になってほしいということです。今は中学生・高校生ですが、将来、10年後、20年後に環境啓発活動を行うリーダーになってもらいたい。その一助として、このプログラムを提供し、それに参加してほしいと考えています。私たちが、環境活動を行う際に関心を持っていることは、環境問題の特性として、全てが繋がっているということです。どれか一つから入っても、連鎖していること、これは環境問題の大きな特徴だと思います。例えば人口が増えれば、食料がたくさん必要になり、そうすると地下水の枯渇が発生し、土壌の劣化、森林破壊が起き、自然災害が大規模化するなどという流れがあります。とはいっても悪いことばかりを考えるのではなく、一つの効果は小さくても長く楽しく続けられる活動をしたいと考えています。そのような考えもあり、どちらかというと多くの人数を集めるより、小さな機会をたくさん作り、いろいろな子どもたちがいろいろな角度から入っていけるプログラムを作っているつもりです。今年も古着リメイクとファッションショーという形でプログラムを組んでみました。中学生・高校生に古着の工場に行ってもらい、話を聞いて、そこに貧困問題があるということを知ってもらいます。そして古着を自ら買って、切って、貼って、洋服を作り、それをバレエダンサーの子どもたちに着てもらい踊ってもらう。これにより、今まで出会うことのなかった子どもたちが出会い、コミュニケーションをする、それを環境活動の中でやっていきたいと思っています。

<質疑応答>

(磯崎委員) どのように参加者を集めているのか教えてください。

(応募者) 一つはオーソドックスに市内の学校にプログラムを郵送しています。知り合いの先生には、直接メールを送り、お知らせをしています。その繰り返しです。

(磯崎委員) 先生とはあまり関係していないということでしょうか。

(応募者) ケースバイケースです。先生が中心となって参加される場合もありますし、子どもが自ら個人で参加していることもあります。

(川崎委員) イベントやセミナーをやる時、運営者は何人ぐらいで、どのような人が携わっているのでしょうか。また、一般社団法人ということですが、今後、プロジェクトをやっていく中で、一緒にやっていく仲間を増やしていこうという気持

ちはありますか。

(応募者) もちろんそのような気持ちはあります。そうしていきたいのですが、今現在は、プログラムをたくさん作っていくということが、優先課題になっています。というのも、今まで様々な取組をする中で、「あれはどうだ」「これはどうだ」と意見を出されてしまい、まとまらないということが多くありました。ですので、とりあえず今は、たくさんプログラムを用意し、様々な提案ができる状態を目指しています。

(為崎委員) 賛助会員から資金を得ているようですが、その方たちは活動に参加していないのでしょうか。

(応募者) はい。協賛金という形で、運営資金をいただいています。直接的な活動には関係していないというのが現状です。実際の運営主体は、私と理事たちです。あとはプログラムなどによりますが、セミナーなどは私一人ということもあります。

(為崎委員) 賛助会員に、お金を出していただくだけでなく、接点を持ち、活動に参加していただく構想はありますか。

(応募者) あります。昨年はその一つの方法として、クラウドファンディングを行い、かんきょう文化祭に対し、関心を持っている方がどれくらいいるのか、実際どれくらいお金が集まるのか、ということを確認しています。

(山口委員) これだけたくさんのイベントができるのは、少人数でやっているからこそその機動力があるからだと思います。活動を通じて感じたこと、学んだことがあれば教えてください。

(応募者) 一人の力は限界があるというのは感じています。また、情報を届ける方法が、少人数だと限られてしまうことや、仮に届いたとしてもこちらの期待するように関心を持っていただくにはどうしたらいいのか、ということについては、これからいろいろな方に聞き、学んでいきたいと思っています。

<意見交換>

(川崎委員) やっていることは子どもたちに対し、良いきっかけづくりになると思うのですが、運営する人たちの輪を広げていくという部分が、気持ちはあっても手がついていないということでした。平成22年から始めている活動ですので、そろそろその部分も進めていかないと、個人の活動の域を出ないという点が残念な気がします。

(戸川委員長) 私が気になっていたのは、フォトコンテストの投票行動が環境行動のきっかけとなっているという部分で、人の巻き込み方などについて、もう少しお聞きできればよかったと思います。確かにかんきょう文化祭では、たくさんの種類のイベントを実施していて、きっかけとして面白いのですが、そのあと、人がどう巻き込まれていくのか、といった点を申請書類の中に見える形で示していただければよかったと思います。

(北村委員) フォトコンテストの発想は面白いと思ったのですが、参加人数を見ると少し寂しい印象でしたので、今後、人が集まる工夫ができるといいと思います。しかし、そうなる資金の問題も関係してくると思います。今後どうやって大きくしていくのか、工夫が必要だと思いました。

(篠木委員) 私も活動そのものは、ユニークで面白いと思ったのですが、巻き込みの状況もそうですし、活動のより具体的な効果をお聞きしたかったと思いました。

<採点>

関ヶ谷市民の森愛護会

<プレゼンテーション>

私が会長として活動し、2年になります。2.5ヘクタールと小さい市民の森ですが、保全管理を行っています。その他にも、たくさんの行事を行っていますが、今回は2つの要点に絞ってご説明させていただきます。1つは、平成25年度に「5か年計画」をつくったことです。14項目に渡り、作業の目標を明確にし、実績、成果をみんなで楽しもうということで、作成しました。29年度でちょうど5年になります。すでに14項目のうち12項目の成果が出てきています。もう1度見直して、来年度5か年計画の締めくくりをしたいと思っています。もう一つは、平成27年度に、横浜市環境創造局みどりアップ推進課に協力いただき、市民の森で4つのゾーニングを行い、保全管理をしっかりやっていくことになったということです。現在、竹林、梅林、ホタルの里、果樹園というそれぞれのゾーンにおいて、成果が出てきています。先週も地元の自治会で観梅会を行いました。梅の花が見事に咲きました。これも、剪定、施肥、根切りなどの指導をいただき、きちんと取り組んだ結果です。梅の実も去年は87kg、一昨年は60kgとその量を記録に残しています。観梅会では「地元こんなきれいな場所があったことを初めて知りました。いいところですね」という声もいただきました。このような輪を広げていきたいと思っています。これからは竹の子のシーズンです。毎年、地元子どもさん、引きこもりの子どもさんの学級との交流を深め、市民の森の良さを伝えていきます。5か年計画とゾーニングに基づく保全管理をしっかりやっていくことが成果につながると思い、頑張っており取り組んでいます。

<質疑応答>

(為崎委員) ずっと活動をしている中で、改めて5か年計画を作るのは、すごいことだと思いますが、誰の発案で、なぜ策定することになったのか、そしてまた、この5か年計画が終了したのち、次の5か年計画を立てる予定があるのか教えてください。

(応募者) 今我々のグループには、企画という部門があり、私自身も最初から入っていますが、5か年計画の策定は、ここが主体となっています。そもそも従来の活動は、山の整理整頓と言いますか、草を刈る、枝を切る、木を切る、とそれだけのことで終わっており、それだけでは面白みが浅いから、自分たちでクリエイティブな項目をつくることで、成果を味わおう、ということになりました。例えば、従来は2つだった散策路を3つにしてみよう。杉の木がたくさんあり、隣近所から陽があたらないというクレームもあるし、切って果樹園にしてみようといったことを14項目挙げ、計画とすることにより、成果を楽しんでいます。5か年計画のその後については、未定です。ただ、行政と協力しないと進まない点、成果の出ていない点については、改めて相談していこうと思っています。

(篠木委員) 5か年計画を立てられて、それが達成できた、できなかったという評価は、ご自身たちで行われているのでしょうか。

(応募者) これについては、役員会の中で決めています。例えば、子ども広場をつくらうという意見があった時、けが人が出た場合どうするのか、という意見が出ましたが、これについては、カブトムシだけにすることになりました。このように、達成可能な目標に修正することも行っています。

(磯崎委員) 小学生や中学生など、子どもたちが森を探索したりするようなイベントは行っていますか。

(応募者) 釜利谷西小学校の1年生が野外授業として散策に来て、私たちがアテンドをしました。虫の取り方などを教えて、先生方にも好評で、次年度もということになっています。

(磯崎委員) 最近の子どもたちは、地域で行く場所がないということが問題になっています。市民の森は、身近で自然を体験できる貴重な場ですので、今後もぜひ続けてほしいと思います。

(川崎委員) 横浜にはいくつか市民の森愛護会があると思いますが、他の市民の森愛護会との交流や情報交換、お互いに協力しあうなどの関係はないのでしょうか。

(応募者) 直接はありません。ただ、横浜市が主催する研修を通じて、他の市民の森の見学などは行っています。

<意見交換>

(為崎委員) 活動をずっと続けていく中で、流れてしまわず、改めて計画を作ることが、非常に他の団体の参考になると思いました。また、内側の体制整備がしっかりできているようですが、外とのつながりがもう少しでくるといいと思いました。そうすると、より一層活動が広がり、発展につながると思います。

(川崎委員) 単純にいろいろな団体とつながればいいとは思いますが、5か年計画を作ったということで、例えば、先輩の市民の森愛護会での課題を聞いたり、あるいは自分達の計画について他の愛護会に参考してもらったりなど、これからのかもしれませんが、市外でもいいですし、ぜひ交流してほしいと思います。そのような交流から、今後ますます発展していけるのではないかと思います。

(北村委員) ポイントになったのは、前回受賞から発展したところだと思うのですが、皆さんがおっしゃるように、5か年計画を立て、取り組んでいるということは非常に評価できると思いました。5か年計画について、他団体へ伝えていくこともぜひ取り組んでいただきたいですし、次の5か年計画も策定してほしいと思います。各ゾーンの順応的管理の中でも、次の管理目標が出てくると思いますので、そちらもぜひ取り組んでいただきたいと思います。

(戸川委員長) より楽しむために、5か年計画をつくったということが、とても魅力的な話だと思いました。

<採点>

特定非営利活動法人 茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会

<プレゼンテーション>

(応募者) 当施設の催しの一つである「めぎせ！ザリガニマスター」について、紹介させていただきます。アメリカザリガニは、要注意外来生物で、当施設でも2004年から駆除活動を続けています。毎年駆除したアメリカザリガニの総量は、年々

減少傾向にあり、地道な駆除活動の成果が表れています。しかし、根絶には程遠く、ザリガニ駆除の困難さを痛感しています。一方で、ザリガニは子どもたちに非常に人気があり、水辺で釣りをしている光景がよく見られます。しかし釣ったザリガニを飼いきれずに当施設に持ち込む子どもが相次ぎました。そこで、2013年からザリガニの引き取りを「めざせ！ザリガニマスター」という催しとして開始しました。この催しは、子どもたちが当施設の外で捕まえたザリガニを持ってきてもらい、取ってきたザリガニの累積数によって、カードをプレゼントするというものです。大事にしていることは、参加者にはまず楽しんでもらい、生き物や自然に対する関心を育んでもらうことです。また、たとえ外来種であってもその命を大事にする姿勢を持つことも大事にしています。子どもたちには、引き取ったザリガニは、動物園の動物たちの餌にしていることを説明しています。この取組に共感してくださった施設が3施設あり、大量にザリガニを引き取っていただいています。またそれ以外にも、当施設の体験用の田んぼの肥料に活用し、無駄にしないようにしています。この活動により引き取ったザリガニは、2万匹を超えており、参加者数は189組に上ります。この催しで、最初はザリガニに全く触れなかった子どもが、次第にザリガニに触れるようになる様子をよく見かけます。またこの催しの効果か定かではありませんが、近隣のせせらぎにザリガニがいなくなったと話す参加者の声も複数あります。さらにはザリガニの減少に伴う在来種の増加について気づき、話してくださるお子さんもいらっしやり、自然環境そのものに関心を持ってもらえたと感じることもあります。印象に残っているのは、参加者の和食料理人志望の青年が、ザリガニを将来の食材として利用できないか考えていると語ってくれたことです。この催しは、施設周辺では、参加者も順調に増えています。今後、都筑の街全体にこの取組を広げていき、水辺の自然環境に関心を持つ子どもが増えていくことを願っています。ひいては生きものの豊かなまちづくり、そして水辺の保全活動の一助となるとよいと考えています。そのために、広報活動を拡充し、また他の活動団体に連携を働きかけていきたいと思っています。

<質疑応答>

(篠木委員) 今の発表ではザリガニについて主にご説明いただきましたが、ザリガニ以外にもいろいろと活動なさっているようで、とても素晴らしいと思います。応募用紙で「一昔前の地域の姿を大切にしていきたい」と主張されていましたが、これはいつの時代のどういう姿を指すのか、ご説明いただけますか。

(応募者) 開発前ということを想定しています。昭和40年以前、ニュータウンができる前は、農業主体で、地域に山と田んぼと畑があって、昔ながらの暮らしをしていたと聞いているので、そのあたりをイメージして、そこにできるだけ近くなるようにと考えています。また、地域の、今70代、80代の方々に地域の暮らし、自然について話を聞かせていただき、参考にしています。

(磯崎委員) アメリカザリガニは、今、川でどのような被害を与えているのでしょうか。昔は田んぼにたくさんいて、稲の苗を切ってしまうという被害がありましたが、聞いたことはありますか。

(応募者) 田んぼの被害については、実際、宮城県に行って見たことがあります。稲

を切ってしまうたり、また田んぼの畔に穴をあけてしまったりするということでした。川や池での被害でよく言われるのは、水草を食べてしまうことです。また魚の卵を食べるなどの影響もあります。

(戸川委員長) 生態系を壊すということでしょうか。

(応募者) そうです。生態系や農業への影響があります。

(北村委員) まず、ザリガニの取組は非常に素晴らしいと思いました。ザリガニの駆除として、ザリガニ釣りをやっているところはあっても、その先の発想がないのですが、こちらの取組では、ザリガニ釣りにゲーム性を持たせて、ポイント制でザリガニを回収するというアイデアが非常に素晴らしいので、これをぜひいろいろなところでやっていただきたいと思います。その上で、次のステップとして、流域全体でザリガニをどうできるかということを考えていただけるといいと思います。また、ザリガニ以外の取組についても、いろいろと取り組まれているようですので、アピールをお願いします。

(応募者) 公園の管理が一つ大きな柱です。それから、地域に根差した公園ということで、地域の方に自然を楽しんでもらう催しをしたりして、地域とともに楽しんで親しむ公園という2本の柱でやっています。公園の管理については、雑木林、竹林、田んぼ、ため池がありますので、それぞれの場所の生物多様性を目標にして保全管理をしています。また、生物多様性に根差すために、調査をきっちりやっているつもりです。

(為崎委員) 2006年から指定管理を受けられたということで、それにより財政的には安定したと思いますが、指定管理制度によって活動が進んだこと、逆に制度により出てきた課題があれば教えてください。

(応募者) 進んだこととしては、指定管理者になったことにより、報告を出さなければならぬこと、審査があるということで、計画をつくり、自己評価をして、公に見てもらえる報告書を作るという部分がしっかりしたと思います。また、体制についても、会計や外向けへのアピールがきっちりできるようになりました。逆に課題としては、書類作りがとて増えてしまい、その部分が苦しいということがあります。

<意見交換>

(為崎委員) 指定管理を受けているということで、財政的に、自分たちで資金を獲得しなければならないような他の団体に比べると恵まれているとは思いますが、その制度の上によって、非常に総合的で、充実した活動をされているということ、「めざせ！ザリガニマスター」のような独自性のある取組も出てきているという点が、とても評価できると感じました。

(篠木委員) 環境活動を続けていくには、楽しさを創出することが重要だと個人的には考えているのですが、この場合も「ザリガニマスター」という楽しそうなイベントがあり、これをきっかけに他と共有してよりいいアイデアを取り入れたり、他の団体に伝え継承したり、という様々な可能性の広がりが考えられること、また活動全体が楽しくできているということが非常に評価できると思います。

(戸川委員長) 指定管理の制度に入りつつ、それ以上に、どうやったら面白いか、ということ非常に考えていらっしゃると思いました。

<採点>

平戸永谷川水辺愛護会

<プレゼンテーション>

平戸永谷川水辺愛護会は、活動を始めて13年になりました。現在、地区の3連合25の町内会、地区の7校の学校、法人会、病院、多くの方に協力をいただいて活動しています。平戸永谷川柳橋から環二平戸3号橋間約1.8kmという非常に大きな範囲の環境整備が、我々の仕事です。環境整備といっても、草抜きと清掃、花壇に花を植えることが主体です。花壇は10か所あり、春と秋にクリーンアップがあります。700~800人が参加し、1,000ポット近くの花の植え替えをやります。また、私たちは10年かけて、この川に河津桜を植えました、今、非常に見頃になっています。4年前から3月の第1土曜日に桜まつりを開催しています。今年は3月5日に行く予定で、今準備をしています。この桜を見て、皆さんが本当に癒やされる街、楽しめる街をつくっていききたいと、日々頑張っています。桜まつりも今回で5回目になります。今年はとても早く咲いて、今ちょうど満開になっています。咲かなかった年もありました。ぜひよろしかったら見に来てください。大変多くの方が、この河川敷を歩いてくれています。そしていろいろな人と触れ合う、これが非常に大事なことだと思います。私たちもいろいろな人と話をしながら、楽しみながらやらせてもらっています。今はちょうど暇がある時期ですが、これから6月~9月となると、雑草との戦いです。月に2回の行事ではとても対応できないので、多い時には週2回程度作業をしています。

<質疑応答>

(川崎委員) 会員の方が100人もいらっしゃいますが、年代的には、ご高齢の方が多いのでしょうか。

(応募者) 企業の方、個人の方、町内会の方、いろいろな方がいらっしゃいます。年代的には30代を過ぎてからの方が多いです。

(川崎委員) 地道な作業をずっと続けられていますので、年月がたつていくと、活動がいい意味で言えば定着、悪い言葉で言えば形骸化して、人が集まらなくなるということがあると思うのですが、このような地道な作業にたくさん人が集まり、会員数も維持されている秘訣は何でしょうか。

(応募者) 同じ目線でやること。上から物を言わないこと。これが鉄則です。まずお願いして、実際に自分たちも一緒に活動する。そして無理を言わない。これが一番大事ではないかと思ひ、実践しています。

(磯崎委員) 清掃活動を地域でやってもなかなか人が集まらないのが現状ですが、皆さんは人を集めるためにどのようなことをしているのでしょうか。これだけ素晴らしい花が咲いていれば、地域の方々は皆、賛成されると思います。けれど、それとまた、実際に清掃に参加されるというのは違うと考える方が、非常に多いと思うのですが。

(応募者) 確かに、いろいろな方がいらっしゃいます。でも、だからこそ、多くの方に共感を得て、協力してもらうことが大事ではないかと思ひます。そして、その時に無理を言わない。お願いして、でも用事があるのでしたら、「そうですか。

わかりました。では次の時にお願いします」ということで、絶対に無理を言わないことが大事だと思います。

(為崎委員) 推薦者の推薦理由に、「会長が変わっても意思が引き継がれている」とありますが、役員交代を円滑にする秘訣と、役員が変わっても目指すところがぶれないというところの工夫があれば教えていただけますか。

(応募者) 役員数は増えています。というより、増やしています。それはなぜかという町内会や地域の方に加わってもらいたいからです。現在 27 人います。

(為崎委員) 27 人いると、人数が多く、意思が統一しづらいということはないのでしょうか。

(応募者) 私は自分の言いたいことを言いますし、相手も言いたいことを言ってきます。本当にざっくばらんにやる。これが大事だと思っています。

(為崎委員) それで、役員交代がスムーズに行く秘訣だと考えてよろしいでしょうか。

(応募者) 役員さんは、皆さん町の人で、気心の知れている人が多いので、私の考えも知っていますし、相手の考えていることも分かります。そうやって、お互いに理解し合うということが一番大事だと思います。

(北村委員) 今後の目標は何かありますか。何かお考えがあれば、教えてください。

(応募者) 今考えているのは、NPO 法人にするかということです。法人化して、私たちの活動にメリットがあるのかどうかを、今検討中です。あとはとにかく、今やっている活動を続ける。続けられる体制をきちんと確立することが大事だと思っています。

<意見交換>

(戸川委員長) 人数がこれだけ増えるというのは、すごいことだと思いました。会長のおっしゃった「上から物を言わない」など学ぶべきことが多かったと思います。

(北村委員) シンプルな活動なのですが、ちゃんと広がっていて、どうやっているのかと思っていたのですが、今回の質疑応答からいろいろなヒントが得られました。他の団体さんにもぜひ参考にしてほしいと思いましたし、今後もこのような地に足をつけた活動をじっくりとやっていかれるのだということが感じられ、好印象でした。

(川崎委員) 私からも、為崎先生からも「秘訣は」という言葉が出てきましたが、このような地道な活動で、イベント的なものは、人を集めることが難しいと思います。何が活動する皆さんの動機付けになっているのか知りたかったのですが、これだという決め手があるのではなく、メンバーの方がきめ細かく声をかけたり、誘ったりという地道なことの積み重ねなのだとは私は理解しました。とても地味なことですが、非常に大切なことをされているという印象を受けました。

(磯崎委員) とても素晴らしい組織ができていますので、これを災害対策などにつなげてほしいと思いました。このつながりをいざという時に役立てることも、ぜひ推進してください。

(為崎委員) NPO 法人化を検討されているということでしたが、NPO 法人化することで、今の組織が変わってくる面もあるかもしれないと思います。意思決定機関のための理事会もできますし、きっちりした事務作業や、一定のルールに従わなくてはならなくなります。今の皆さんのご意見を聞いていると、ゆるゆるとつ

ながっていて、同じ目線で、という形で活動されているようですので、その点がNPO法人化で変わる可能性もあるかもしれないということを、ぜひ慎重にご検討いただければと思います。

<採点>

横浜温暖化防止推進員会議

<プレゼンテーション>

温暖化防止推進員について、知らない方が多く、我々も苦勞しているのですが、1998年に国の温暖化対策推進法に基づいてつくられた制度です。各県で推進員を募集することになり、2000年に神奈川県は推進員制度を発足させており、横浜温暖化防止推進員会議も10数年たっています。従来はどちらかという推進員のレベルアップのための勉強や行政との連携がメインで、推進員会議の推進員が具体的に何か活動するということがあまりありませんでした。私が2年前に代表になった時に、そのような取組をやりたいと思ひまして、約100人近くの推進員で、具体的な活動をやるということから始めたのが、今回ご説明する地区センターにおける活動です。地区センターは各区にあり市内全部で約80か所あります。地区センターを使わない手はないと思ひ、地区センターに掛け合い、場所を借りました。ご存知のように地区センターには、老若男女、子ども連れも含め、様々な方がいらっしゃいますので、その方たちを対象に普及啓発を始めました。勉強会や現地見学会など、従来からやっている活動も続けています。それに加えて、今回地区センターの活動を広げるとというのが、2年間かけ、今年度3年目になる取組です。地区センターでは場所を借りて、準備をして、なるべく子どもたちや高齢の方にも分かってもらえるような取組をしています。地区センターで、地球温暖化と言っても、まず聞いてもらえません。素通りされてしまいます。足を止めてもらうための工夫をこの2年間やってきて、だいぶ分かってきました。これは、以前から言われていることですが、体験型にするということです。表を作って、地球の状況や温度変化を説明しても、ほとんど素通りされてしまいます。そうではなくて、節電ということ言えば、手回し発電機を回してもらおう。これだと必ず回してもらえます。最初に白熱球を回し、その後LED電球を回してもらおうと、誰でもすぐ、軽いと驚きます。これで、CO₂を減らすことができ、電気代も助かると説明すると、非常によく理解してもらえます。それともう一つ、非常に効果があるのはエコドライブについて説明する時に、ドライブシミュレーターを使うことです。これも一度体験してみると、効果があることが分かるので、実際にエコドライブに取り組んでみようと分かってもらえることが非常に多いです。このように体験型がいかに大事なのか最近分かってきたところですので、来年以降もさらに広げて全部の地区センターで実施したいと思っています。

<質疑応答>

(為崎委員) 地区センターでの実施については、かなり成果をあげられているようですが、これまで行われてきた現地見学会などに、会員以外の人を巻き込んで、参加できるようにしていくということはお考えですか。

(応募者) 今のところは推進員のレベルアップが目的のため、推進員に募集をして現地見学会などを行っていますが、希望があれば推進員以外の方にも声をかけるこ

とが必要だと思っています。ただ、現在は推進員だけです。

(為崎委員) 現地見学会は、せっかくの機会ですので、参加人数 15 人や 20 人などではもったいないように感じ、聞かせていただきました。ぜひ他の方も参加できるとよいと思います。

(磯崎委員) 今、地区センターは年間 8～10 万人くらい利用者がおり、老人会などいろいろな活動をされていると思いますが、その場所で、推進員が温暖化防止のイベントなどを行うということですか。

(応募者) そうです。老人会や折り紙をやっている隣などで行って、両方参加していただいたりしています。

(磯崎委員) 効果を感じていますか。

(応募者) お子様連れの方が節電について興味をもってくれるなど、とても効果があると感じています。

(篠木委員) 先ほどのお話で、体験型が効果的だということで、それは何となく理解できるのですが、単に「発電した」という体験で終わってしまっただけでは効果がないと思います。それ以外に何らかの工夫があると、CO₂削減に本当に意味のある体験になると思うのですが、どのような工夫をしているのか教えてください。

(応募者) 今、一つ一つ進めているところですが、手回し発電機は非常に分かりやすく、「回してください」というと、よく分からなくても回してくれて、そこで軽いと感じることで、取組につながる効果があると思いました。それ以外にも節電で言えば、例えばドライヤーなどを同時に使うとブレーカーが落ちるということがありますが、時間差なら落ちないということを伝えるために、2つのドライヤーのスイッチを同時に入れて、実際にブレーカーを落として見せるなど、目に見えて分かるように工夫をしています。まだ3年目で十分ではないのですが、何が目を引くかという点で工夫しながら取り組んでいます。

(川崎委員) 推進員に限っての会員ということですが、96 人いらっしゃるということで大所帯だと思います、イベントの連絡や事務的なことは会長がやっているのですか。

(応募者) 担当もいますが、会としての連絡は私からメールで行っています。

(川崎委員) 運営全体を、会でやっているということでしょうか。

(応募者) はい。運営委員、合計 6 名でやっています。

(北村委員) 今後どうやって活動を展開していきたいかということで、センターの活動を広げていく以外にアイデアなどがありましたら教えてください。

(応募者) まずは、センターの取組を進めていきたいというのが 1 番ですが、自治会との関係を重視してしまっていて、どう連携していくかが課題となっています。戸塚区ではすでに少し始めていますが、他の区では行っていないので、来年度から自治会との連携を進めたいと思っています。

(川崎委員) 推進員自体は、任期が終わると再任があったとしても、交代もあるということで、それは、多くの方が委員をやるために、いいとは思いますが、推進員の任期が終わると推進員会議からも脱会するとなると、せっかく自治会と関係を持っても、会のメンバーが変わると、関係が途切れてしまうということはないでしょうか。

(応募者) それはあると思います。2年ごとに交代になりますし、やめる方もいますので。会員が減っているのは、私どもの課題です。96名を維持するためにどうするか、取組の継続性をどうしていくかが課題になっています。

<意見交換>

(戸川委員長) 継続性が課題ということで、温暖化防止推進員自体を増やすための仕組みがもう少しできると面白かったのではないかと思います。その部分ができてくると、地区センター等で活動される方も増えてくるのではないかと思います。今はまだそのためのプロトタイプを作っている段階という印象でした。

(為崎委員) 先ほどの5か年計画を作られた団体さんもそうですが、新体制になって新しいことに取り組むのは、すごいことですし、他の団体さんの参考になると思いました。しかしまだ、新体制になり、地区センターの活動を始めてから間もないので、今後の活動の充実を見たいと思いました。

(戸川委員長) そうですね。例えば、会員が150人に増えた、などの成果があると、評価しやすいと思います。

(川崎委員) 推進員が、国の制度だとすると、いきなり3、4倍には増やせないのかもしれないと思うのですが、任期が終わって退任された方々も、希望があれば会に残れるなど、裾野を広げていくという考えもあると思いました。推進員とそうでない方が活動することで、何か問題が出てくるのかもしれませんが、推進員を経験された方がそのまま活動から離れてしまうことを避けるために、何らかの工夫があればいいと思いました。

(篠木委員) 推進員ご自身がどう活動していくかということは、全国の課題だとうかがっていますので、推進員の活躍する場所を何らかの形で提供しようと試みているという点では、頑張っているという印象を受けました。

(北村委員) 推進員以外を会に入れてもいいのではないかと思います。推進員を中心にするのはよいのですが、もっと他のいろいろな人が会員になることで、活動が広がるのではないかと思います。

<採点>

特定非営利活動法人 楽竹会

<プレゼンテーション>

行政からの表彰はこれまでもいただいています。実は去年も、私が副会長をしている宮沢の森愛護会で「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰をいただいています。この流れの中、なぜ今年また申請したかについては、御質問があれば、後程回答いたします。まずどういうことをやっているのかということですが、竹林の整備事業として、約7,000本の竹を粉碎しています。この活動はたくさんの地域の方々に協力いただいています。次に学習支援事業です。これは、本当にいろいろなことをやっています。竹工芸品をつくる指導や、竹で笛をつくり吹くといったことなどです。それから、竹琴太鼓による訪問演奏は、高齢者の施設で、毎月4～5か所回っています。いろいろな分野でいろいろな活動をしており、学校関係では、小中高約20の学校で活動をしています。横浜国立大学や県立瀬谷西高等学校のキャリア講座などでも活動をPRしています。次に協働事業ですが、これが最大のテーマです。いろいろな

ことをやっていますが、養蜂事業に大々的に取り組み始めました。前回受賞から何が変わったかという資料には記載しなかったのですが、それはこの場でお伝えしたかったということもあります。手づくりで行っています。

<質疑応答>

(戸川委員長) プレゼンテーションの最初におっしゃられましたが、なぜ、再応募されたのでしょうか。

(応募者) 瀬谷区の表彰制度は他薦しかないからです。そこで、こちらの賞で厳粛に審査していただいて、受賞した際には、大々的にPRしたいと考えています。

(磯崎委員) 地権者からよく、孟宗竹はどんどん増え、雑木林も荒らしてしまい、困っていると聞きますが、どうでしょうか。

(応募者) その通りです。ですので、私たちは、竹の活用として、微生物の専門家と一緒に、土壌改良で微生物がどう挙動するかについて研究を始めています。また、360万円の粉碎機を自分たちで購入して、取り組んでいます。

(為崎委員) 資源循環環境保全型循環農業について、申請書の「企業等との関わり」に、たくさんの企業が書かれているのですが、このような企業とのネットワークづくりのポイントがあれば教えてください。

(応募者) 人間関係です。誠実でまともにやっていたら、信頼関係ができます。信頼の信は、にんべんに「言」です。まずは言葉をかわすことです。

(北村委員) 磯崎委員がおっしゃったように、孟宗竹は問題になっていると思うのですが、1番困るのは、粉碎した竹チップの行き先をどれだけ確保できるかということだと思います。竹チップはどうしているのでしょうか。

(応募者) 個人でお持ちの土地には、粉碎したものを撒いています。そうすると微生物によって分解され、柔らかくなって、竹の子も素晴らしいものができます。チップを山にしておくと、カブトムシがたくさんきます。

<意見交換>

(為崎委員) 北村委員がご質問された粉碎したものの処理方法で、竹林に戻すという方法は、循環農業を推進するものなのでしょうか。専門家のご意見を聞かせてください。

(北村委員) 例えば、チップをどこかへ持っていったり、何か作ったりすると大抵失敗しています。竹林の中に戻すのは、シンプルないいアイデアだと思います。

(2) 企業の部

カーボンフリーコンサルティング株式会社

<プレゼンテーション>

2007年に創業し、10年目というところでまだまだベンチャー企業の域を脱していないところです。コンサルティング会社として、お客様の環境活動を推進することを事業として行っています。横浜では、例えば、石井造園さんという会社では、横浜の海と被災地の森を支援することで、市内の施工業務で排出されるCO₂をすべて海と森が吸収するというカーボンオフセットのお手伝いをさせていただきました。また、大川印刷さんという会社では、印刷にかかるCO₂を算定させていただき、CO₂をゼロにした、CO₂ゼロプリントという事業のお手伝いをしています。その結果、NHKやテ

レビ神奈川の番組で特集されたり、新聞でゼロプリントを始めようとPRされたりしています。企業が事業を広げるほど、環境がよくなるということ、自然環境とのつながり役になって、お手伝いさせていただく。これを、横浜を中心に全国に広げているところです。一方で、我々自身も環境活動をしなくてはいけないということで、ボランティアで、サッカーチームの横浜FCのエコパートナーになり、毎試合ごとに入場者1人あたり1kg分CO₂を減らすという取組を、弊社の協賛でやらせていただいています。毎回オーラビジョンに、今日はこのくらいCO₂が削減されました、と掲示してもらい、来場者に伝えています。この取組を4年続けています。また、グリーン購入ネットワークに所属し、市民や企業の皆さんが連携し、環境活動を進めていくお手伝いをしています。最後に、中国の内モンゴルにおいて植林事業を始め、企業の森をつくっています。今現在72,000本ほどカラマツの木が植えられています。

<質疑応答>

(為崎委員) 企業としての取組はいろいろされていると思うのですが、従業員全員の日頃の取組として、どれくらい意識があるのかが気になります。申請書では、日頃の取組は、ビル管理会社が環境の取組をしっかりとやられていて、そちらが主導になっている印象を受けたのですが、御社の従業員さんが主体で取り組まれている日頃の活動があれば教えてください。

(応募者) 小さい会社で、テナント一部屋という環境ではありますが、裏紙使用やごみの分別、ウォーターサーバーの電源を落とす、エアコンの適切な利用など、部屋の中でできる環境活動を粛々とやることについては、従業員に浸透しています。

(川崎委員) 応募用紙の「環境に配慮した製品」の中で、「CO₂排出量の削減についてのコンサルティング」と「クレジットの販売」がありますが、どちらが多いのでしょうか。

(応募者) クレジットの販売が多いですが、販売する事業者にお金が渡ること、新しい設備投資や新しい植林ができるなど、クレジットを販売することで環境に関する取組にお金がまわっていくと考えています。

(川崎委員) メインは排出量削減そのもののコンサルティングよりも、オフセット事業に取り組むことで、それに付随して、排出量削減に取り組まれているということでしょうか。

(応募者) カーボンオフセットの定義として、お金でCO₂の問題を解決するというよりも、まず減らしていこうということがあります。お客様から相談があったら、まず、現在の排出量を測定し、無駄がないかどうかを調べ、次に省エネを行って減らし、それでも減らせない部分についてオフセットするという3段階で行っています。ですので、プロセスとして、排出量削減のコンサルティングが間違いなく入ってくるようになります。

(戸川委員長) 御社は、事業活動自体が環境負荷の軽減につながるという位置付けだと思います。そこで、クライアントの企業に、環境負荷の軽減を事業活動に入れていくという話をどのようにしているのか、苦労している点やポイントを教えてください。

(応募者) 最近ですと、“ぞうきんを絞りきっている”お客様が多いので、従業員の

通勤を車ではなく公共交通機関にするなど、社内的に無理がかかりそうなところに取り組みがちなのですが、そうではなく、社会貢献活動や、外部で減らしている人たちを応援しようという形で提案しています。絞り切れない部分は絞り切っ
てほしいと提案しますが、やるべきことが終わっている企業に対しては、外に
対しての貢献を提案することが多くなってきている状況です。

(山口委員) 地域社会との連携についてですが、市民との連携は何か考えていらっ
しゃいますか。

(応募者) 活動としては市民の皆様がいらっしゃるような環境イベントにブース出展
をするという取組を、年に2、3回ほどやっています。弊社のお客様の事例を紹介
するなどの内容で、市民の皆さんに啓発活動をし、コミュニケーションをとっ
ています。

<意見交換>

(北村委員) 環境に対する姿勢を商品にされているということですが、社内で取り組
んでいる内容が、取り組んで当然と思われるレベルだったので、評価が難しかっ
たです。もっと、環境の企業ならではというところが聞けるとよかったですと思
います。

(為崎委員) 私も本業そのものの環境貢献を評価するということと、先ほど質問させ
ていただいた企業内部、自社での取組をどう評価するかが難しいと思っていたの
ですが、今お聞きしたことで、市内の企業に対して環境コンサルティングを行う
ことで、市内全体への環境貢献につながることも、一つ、評価のポイントになる
と思いました。

(山口委員) 企業ですと、環境と経済の共生という点が課題になりますが、カーボン
フリーコンサルティングの場合、企業が伸びれば伸びるほど環境がよくなる、と
いうコンセプトがとても大切で、新しい切り口だと思いました。そういうコンセ
プトの中で取り組まれていることが大変評価できると思いました。

(川崎委員) プレゼンテーションでご紹介されたのは、横浜の企業でしたが、応募資
料の取引相手を見ると、横浜に限定せずに企業活動をされているということで、
横浜の環境に対して、というところが、申請書を見る限り希薄に感じました。ま
た、市民団体としての目でみると、質問もしましたが、カーボンオフセットをす
る前に、CO₂の排出量削減が、本当に絞り切った状態なのかどうなのかというこ
とをきちんと見なければいけないと思いました。今現在で絞り切ったということに
なると、現在の温暖化の問題はどうしていくのかという点で、矛盾を抱えること
になってしまうのではないかと思います。

株式会社東芝 ストレージ&デバイスソリューション社 大船分室

<プレゼンテーション>

大船分室の位置付けですが、小向事業所という川崎にある事業所の分室であり、現
在約3,000人が執務をしています。小向事業所全体では、13,150人という大きな組
織になっています。大船分室は1994年に約1,500人でスタートしまして、今は当時
の倍の人数になっています。2010年に横浜市分別優良事業所を取らせていただき、
またアドバイスをいただいたことで、人数は増えていますが、廃棄物は減少傾向にあ

ります。廃棄物削減をするための施策の一つとして、リユース展を行っています。これは、各部門で不要になった文房具や什器等を必要とする職場に提供するものです。大船分室のリユース展の実績を見ますと、持ち帰り率、リユース重量ともに増加傾向にあります。スケールメリットが得られており、事業形態の違いによって、ある場所ではいけないけれど、ある場所では必要ということで、持ち帰り率が増加しています。次に社員食堂を中心にした取組を紹介したいと思います。ろう細工や写真などの展示サンプルを利用することにより、3年間で2トンの生ごみを削減しています。ライスのサイズも4種類にすることにより、生ごみの量が減っています。これは横浜市からの生ごみ削減のアドバイスで始めました。メラミン食器のリサイクル化も行っており、半導体の研磨剤や航空機の塗装剥離剤として利用しています。また大船分室では全員で分別トレーニングを行っています。東芝従業員だけでなく清掃会社の方など大船分室に関わる方全員が、現場で取り組んでいます。また、緑のカーテンをつくり、そこで栽培したゴーヤを社員食堂で提供しています。これも栽培から収穫まで一貫して、毎年取り組んでいます。社会貢献としては、被災地の復興応援ということで、事業所をあげて、食堂特別メニュー提供や応援販売会を行っています。また献血は20年間続けており、2015年度に日本赤十字社金色有功章を受賞しています。

<質疑応答>

(篠木委員) 東芝さんの取組は、従業員一同が体で環境活動をしていくという印象を受けましたが、従業員の皆さんを巻き込んで分別に取り組み、リユースをしていくと、その中で変化が表れるのではないかと思います。その中で最も顕著なものはどういうものか、それが事業にどのように生かされているかということについて教えてください。

(応募者) 2010年に横浜市分別優良事業所の認定を受けたのですが、実はその前は、分別に非常に悩んでいました。一方的に分別を呼び掛けても、皆さん仕事が非常に忙しく、分別に時間をさけないこともあり、なかなか取組が進みませんでした。その時、横浜市分別優良事業所の制度を知りまして、これを目標にすることで、皆さんベクトルが一つの方向に向いて、今まで分別に積極的でなかった方も非常に協力的になってきました。分別トレーニングについても、職場からの提案で、ぜひやってほしいという積極的な意見がでて始まっており、一つの方向に向かうことで、高い意識を持つことができました。事業所に対する貢献については、まず廃棄物の量を削減することにより、廃棄物処理費が削減されていますし、リユースによって、新たに購入する経費も削減できています。

(為崎委員) 従業員にとどまらず、調達先や常駐会社を巻き込んでいるということですが、そのような方たちに指導したり提案したりする際に摩擦が生じるようなことはないのでしょうか。またそこで賛同を得るためのポイントがあれば教えてください。

(応募者) そもそも組織として、関係会社、常駐会社を巻き込んだ形になっており、その中で説明会を行い理解していただいています。繰り返し説明し、ご納得いただいて協力していただいています。

(為崎委員) 企業として取り組みやすいポイントがあれば、教えてください。

(応募者) 例えば、私たちの取組の一つですが、大気汚染防止月間などにアイドリン

グストップのお願いについて、運転手さんにアイドリングストップに協力していただくことを呼びかけるビラを配っています。弊社の従業員だけでなく、運送業者や取引会社の方など、入場される方すべてを対象にしていますが、これは運転手さんなど一番車を利用される方々に直接協力をお願いすることができ、そこからボトムアップという形をとれるところがポイントになっており、他の企業さんでも同じような形で取り組みやすのではないかと思います。

(磯崎委員) アイドリングの話がありましたが、ビラを配って普及啓発に取り組まれているということでしょうか。

(応募者) 敷地内に入る業者さんの車に対して、納品業者や運送業者さんにもビラを配るのですが、そのままですとごみになってしまうので、10枚ほど用意し、入場の際に配って、退場の際には返してもらっています。小さいことですが、そのような取組もしています。

<意見交換>

(戸川委員長) リユース展は、これくらい大きい企業でやると一大イベントになるということがよく分かりました。発展して、取組が大きくなり、従業員などに伝わっていることが応募資料から見られたので、面白い取組だと感じました。

(為崎委員) 大企業だからできる取組もあると思うのですが、今のお話の中で、地道なところでの取組もお聞きでき、市内のいろいろな企業が参考にできることもあったのではないかと思います。

<採点>

株式会社よこはまグリーンピース

<プレゼンテーション>

弊社は、平成23年に起業いたしました。その8年前、平成15年に、横浜野菜推進委員会を立ち上げ、代表として横浜の地産地消を進める活動をしてきました。今回は企業の部でエントリーさせていただきましたが、市民団体と同じように、横浜を地産地消の代表都市にしたいと思って活動しています。なぜ代表都市にしたいかというと、横浜の農や食が豊かになっていくことで、横浜の新たな魅力を生み出し、また、次世代の子どもたちにそれを残していきたいと思っているからです。私は料理人で、普段は二つの飲食店を行き来して厨房に立っています。ですので、料理人の立場で、地産地消を実践する料理人の育成や理解を深める活動をしていくことと、企業としての地産地消の活動との両輪を持ち、取り組んでいます。最近では、横浜市資源リサイクル事業協同組合さんから仕事をいただき、横浜リユースびんプロジェクトとして、リユースびんを使って横浜市内の野菜と果物を使った小松菜ジュースとゆずサイダーを作りました。リユースびんは非常に意味があって、びんを回収することが一番の目的です。びんを使うことで、新鮮な野菜や果物のフレッシュさを味わえる、今までにないようなおいしいジュース、サイダーができ、またびんを回収するという、非常に意義のある活動をさせていただきました。今、もう一つ、湘南ゴールドという柑橘系の果物のジュース開発をしているところです。今後は試飲レベルではなく、事業の柱としてリユースびんにも取り組んでいきたいと思っています。

<質疑応答>

(為崎委員) 地産地消を推進されている中で、お客様は横浜野菜を使った料理を楽しむという気持ちはあると思うのですが、そのことが環境に貢献しているという意識も持ってもらうために、お客様の意識啓発において何か取り組まれていらっしゃいますか。

(応募者) 店内に生産者さんのイラストや写真等を掲示したり、「地場野菜を食べましょう、食べるとこのように環境を守ることになります」というメッセージを置いたりしています。以前はなかなか伝わらなかったのですが、今はお客様が自分たちで畑に行くようになるなど、地産地消について理解していただけていると感じています。

(為崎委員) 横浜野菜を楽しむだけでなく、それが環境によいことだと理解するところまでつなぐことができているという理解でよいのでしょうか。

(応募者) そのように理解しています。

(磯崎委員) 横浜野菜の産地は具体的にはどこでしょうか。

(応募者) 西区、中区以外のすべての区になります。

(北村委員) 地産地消の見どころを巡るバスツアーは、面白いと思ったのですが、商売の一環のようにも見えます。実際はどうでしょうか。

(応募者) 全く利益はありません。逆にバス代で足が出てしまいますが、お客様への貢献と考え、普段我々はこういう気持ちで料理をつくっていて、こういう生産者とお付き合いしているということを伝えるために、毎年必ず開催しています。これは半年くらい前から準備をして、毎回満員になります。そして大赤字になります。

(川崎委員) 従業員の方は、パートが圧倒的に多いようですが、お客様とのやりとりで、どこの野菜なのか、残ったらどうなるのか、という話があった場合、従業員の方が、今おっしゃった理念や、どこの野菜かということを説明できるように教育をされているのでしょうか。

(応募者) 基本的に行っていますが、伝えきれない部分もありますので、昨年出版したレシピ本を各テーブルに見本として置いて読んでいただくこともしています。相鉄線のいずみ野の店舗では、パートの方々が、元いずみ野のPTAの方なので、地元の良さをお客様に積極的に伝えてくれるという利点もあります。

(篠木委員) 社会貢献活動として「味覚の授業」を、小学校、児童養護施設等で行っているということですが、どのようなつながりで授業が行われたのか、またこういった取組を今後展開していく予定があるのか、という点について教えてください。

(応募者) 5年ほど前から、いずみ野小学校で、私がやっている濱の料理人という団体が、年1回、地元の食材を使った「スーパー給食」という給食の献立の提案をさせていただいており、それがきっかけで始まりました。他の小学校にも広がっている取組で、今3つの小学校で行っています。児童養護施設での料理塾は、私の方からアプローチをして始め、将来地産地消を実践する料理人の育成を視野に入れて行っています。今後、そういった機関のようなものを作りたいと思っています。

<意見交換>

(磯崎委員) 横浜市は農家が少なくなってきており、地域の生産者を大事にしていくことはとても大切だと思います。給食の話もでしたが、地元の食材を使ったレシピ本もいいと思いますし、ぜひ横浜野菜のPRを続けていってほしいと思いました。

(為崎委員) 横浜野菜を使っているお店はそれなりの数があると思うのですが、そのようなお店が、環境活動賞の対象になるかどうかは、地元の野菜を楽しむというだけでなく、それが環境を守ることに繋がっているという意識を、どれだけいろいろな人に啓発できているかというところによるとと思います。そこで私は、お客様に伝わっているかという質問をし、川崎委員は、従業員の意識について御質問されたと思います。その部分がしっかりと伝わるような形で、啓発が推進されるといいと思いました。

<採点>

(3) 児童・生徒・学生の部

フェリス女学院大学エコキャンパス研究会

<プレゼンテーション>

まずエコキャンパス研究会の発足について御説明いたします。もともとは、環境問題に関心のある学生が、ゼミの活動として始めたのがきっかけで、キャンパスの施設のエコ化に伴う、キャンパス内のビオトープづくりや、自然エネルギーに関する親子講座を開始しました。そして2004年4月から大学公認の部活動として活動をしてきました。フェリス女学院大学の「For Others 他者のために」という理念のもと、環境という堅苦しさを取り払い、文系女子大生の私たちにもできる楽しいエコ活動をテーマに活動しています。また、自分たちがやりたいことを楽しみながら実現していく、それが周りの人にエコを楽しんでもらうために必要であると考え、話し合いで活動内容を決めています。主な活動としては、キャンパス内で自然観察の親子講座や、地域活性化を目的とした農業体験合宿などを開催しています。また熱帯雨林保全のため、森と共生して生産されるヤシ砂糖を支援しようと、インドネシアで現地調査を実施しています。大学周辺の洋菓子店やレストランなどと協力して、ヤシ砂糖を使ったクッキーなどを作り、消費拡大にも努めています。また、例年行っている地産地消をテーマとしたヴィ・ド・フランスさんとのコラボレーションとして、総菜パンの開発をしているのですが、昨年度は地産地消というテーマに加え、ヤシ砂糖を使っていたくことに成功しました。最後になりますが、先月行われました毎日新聞社主催の毎日地球未来賞という食料、水、環境の問題解決に取り組む団体を広く世間に知っていただく賞があるのですが、そこで「次世代応援賞」を受賞しました。誰にでも取り組みやすい環境活動を自分たちで楽しみながら活動していく姿がよかったとお褒めの言葉をいただき、この言葉を励みにこれからの活動も頑張っていきたいと思っています。

<質疑応答>

(為崎委員) いろいろな企業とつながって展開をすることは素晴らしいと思うのですが、例えばヴィ・ド・フランスさんのパンは、イベントの時だけ販売する形だと思います。それをヤシ砂糖とヴィ・ド・フランスをつないで、定番の商品にして

いただくという構想はないのでしょうか。

(応募者) 確かに、ヤシ砂糖をヴィ・ド・フランスが購入し、利用していただければ、それが一番いいと思うのですが、ヤシ砂糖が普通の白砂糖の10倍くらいの価格ですので、現在は難しい状況です。もっといろいろな企業に普及して、値段をもう少し抑えた状態にすれば使っていただけるのではないかと思います。

(為崎委員) 女子大生が取り組んでいるからコラボレーションしている、で終わるのではなく、それを通じて、企業さんに価値が伝わり、企業さんの意識も変えるような活動に発展すると素晴らしいと思いましたので、質問させていただきました。

(篠木委員) 大学生は4年生で卒業してしまうので、活動の継続性、組織をどう保っていくかということが課題だと思います。応募用紙で、今年は1年生を役員に入れたとありましたが、1年生を役員に入れることで、どのような効果があるのか教えてください。

(応募者) 活動はだいたい2、3年生が中心に行っているのですが、1年生を役職につけることで、活動の中で受け身になることを防ぎ、より積極的に1年生全体が活動に参加してくれることを期待しています。

(篠木委員) 実際、その期待どおりになっていますか。

(応募者) なっていると思います。横浜市が行う「全国都市緑化よこはまフェア」での活動は、1年生主体で行ってもらうのですが、そのようなところで効果が出ているのではないかと思います。

(磯崎委員) 町内会と連携した駅前でのイベントで、商品化も行ったということですが、その感想を聞かせてください。

(応募者) 商品化したものを、直接お客様に買っていただいたのですが、地産地消やヤシ砂糖について説明して、お客様が実際、地産地消の野菜が入ったパンやヤシ砂糖が入った商品はどれか聞いてくれると、環境保全に興味を持ってくださったのだと感じ、嬉しく思いました。

(戸川委員長) 第22回で実践賞を受賞してからの発展内容をきちんとまとめてくださっていて、大変嬉しく思いました。引継ぎの実施については、前回こちらで提案させていただいたことだと思うのですが、ご苦労された点やポイントがあれば教えてください。

(応募者) 共通のノートをつくって、そのノートに各企画の成果、内容をまとめる対策をしています。

<意見交換>

(戸川委員長) 第22回で、我々が伝えたことを実行していただけたので、とても嬉しく、心強いと思っています。

(為崎委員) 大学生の活動は、そもそもイベントや一時的なものになりがちですし、企業との連携も大学生だから応援してあげようというスタンスだと、一時的なものは成立するのですが、それをどうやって継続的な活動にしていくかが課題になると思います。今、いろいろなところとつながっていてモデル性があるのですが、定着するものにできれば、もっと一歩先に行く活動になると期待しています。

(北村委員) 前回からの発展が見られてすごくよかったです。今後、企業との取組や

継続性というところを目指して取り組んでいただき、更なる発展を期待したいと思っています。

(川崎委員)エコキャンパス研究会として学生たちが自発的に取り組むことはとてもいいですし、生ごみのリサイクルや学食メニューの提案などもされているようですので、大学の方ももっと学生の意見をきちんと受け止めて、推進する仕組みがあれば、大学と学生の協働したエコキャンパスが実現するのではないかと思います。

<採点>

横浜市立三ツ沢小学校

<プレゼンテーション>

三ツ沢小学校ではホタルを卵から成虫になるまで愛育しています。これは学校全体の取組ではあるのですが、主にホタル委員会の児童が中心となって活動しています。委員会の活動は主に、常時活動と広報活動があります。常時活動は、毎日のホタルの幼虫の餌やり、水替え、それからカワニナという生餌の準備などで、休日以外毎日、委員会の児童が担当の曜日を決めて行っています。夏休み冬休みなどの長期休暇も委員会の児童が、餌や水替えをしています。子どもたちはこの活動を、命をつなぐ責任がある活動、と考え取り組んでいます。広報活動では、主に愛育集会、放流会、ほたピかる会、観察会というものがあります。4月の始めに愛育集会があり、ホタルの幼虫がどういうものなのか、新しい1年生から6年生までに説明を行い、その後1週間、各教室で愛育をし、触れ合ってもらおうという期間を設けています。委員会の児童たちがこの集会の主体となっており、その週の金曜日に放流会を行っています。校内に放流できる場所があるので、そこで行っています。放流して、ホタルが光り始めた頃に、ほたピかる会という、これから観察会が始まるということを伝え、またホタルが光ったお祝いをする会があり、子どもたちが劇でホタルの説明を交えながら行っています。この活動は、28年目になります。子ども自身がホタルは三ツ沢の伝統だという思いを持っていて、ホタルを大事につなげていきたいと思っています。また、教職員もホタルの愛育活動については、4月に必ず共有していて、職員が変わっても引き継ぎつなげられるようにしています。

<質疑応答>

(北村委員)委員会活動というのは、図書委員会など他の委員会と同列の扱いなのでしょうか。

(応募者)そうです。学校の委員会の1つという扱いになります。

(北村委員)そうだと、子どもたちがどのくらい自主的なのかということが気になるのですが、ホタル委員会は立候補者が多いのでしょうか。

(応募者)とても人気があります。もう1つクジャク委員会も人気があるのですが、子どもたちは、三ツ沢といえばホタルという意識があり、委員も毎回取り合いで、諦めてもらう人もいます。また、5年生でやって引き続き6年生もやりたいという子どもとても多いのですが、交代してもらっているような状態です。

(北村委員)丸茂先生が委員会の発足当時から関わっているようですが、丸茂先生以外の専門家とつながりはあるのでしょうか。

(応募者) 丸茂先生は、横浜ホタルの会の方で、飼育の指導をしてくださったりしているのですが、丸茂先生以外にも横浜ホタルの会との交流があり、他の方々も実際に来てくださったりもしています。常につながりがある状態だと思います。

(磯崎委員) ホタルというのは、飼育が難しいと思います。それだけきれいな水の流れが校内にあるのでしょうか。

(応募者) ホタルの里というところがあり、水は循環させているのですが、そのろ過機も子どもたちが試行錯誤して作っており、常にきれいな水が流れる仕組みになっています。

(磯崎委員) ホタルはどのくらいの頭数飛ぶのですか。

(応募者) 多い日は30~60頭くらいです。夜は子どもが観察できないので、教職員が毎日、土日も含めて観察していますが、20頭は飛んでいます。

(山口委員) ホタル委員会に立候補して、なれなかった児童さんもいるということですが、どのように選ばれているのでしょうか。

(応募者) 担任の先生によって決め方が異なることもありますが、ほとんどの場合は、教室の前に立ち「私は、ホタル委員になってこんなことをしたい」などの自己アピールをして、それを聞いたクラスの児童たちが、この人をお願いしよう、と決めることになっています。

(為崎委員) サポートされる先生のモチベーションが落ちないようにする工夫はあるのでしょうか。

(応募者) 光るだけでモチベーションは盛り返します。ですので1年に1回は、今年も光ってよかった、ということで、モチベーションが上がります。過去には光らなかつたこともあったようですが、それでも、子どもたちが「どうしてだろう」と考えて、取り組んでいくことが大事だと思っています。子どもたちも活動自体を楽しんでおり、光らせることだけが目当てにはなっていません。

<意見交換>

(北村委員) 小学生の場合、毎回審査会で問題になるのが、自主性があるかどうかということだと思うのですが、応募資料に書きにくい部分でもあるのですが、ホタル委員がじゃんけんで負けた人になるような人気のないものだったらどうしようと最初は不安でした。けれど実際はとても人気があって、自分の思いを伝えないと入れないということも分かり、自主的に児童の皆さんが取り組んでいることが明らかになったと思います。

(為崎委員) 先ほど、「三ツ沢といえばホタル」ということを聞いて、ここまできると文化になっていると思いました。生徒も先生も変わっていく中で、継続することは大変だと思うのですが、このように「三ツ沢といえばホタル」という文化ができあがってしまえば、それが風土になって、底力になっていると感じました。

(川崎委員) 「三ツ沢といえばホタル」という文化は素晴らしいと思います。きっと地域の方も同じように思っていると思いますので、例えば自治会、町内会、他の地域の団体との関わりの中で、いろいろな人が関わられるような文化になっていると一層いいのかもしれないという気がしました。

<採点>

2 生物多様性特別賞審査

(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の審査に入ります。事務局は、事前審査の結果を報告してください。

(事務局) 事前審査における生物多様性特別賞への推薦は、特定非営利活動法人茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会が5票、横浜市立三ツ沢小学校が1票、該当なしが1票となっています。

(戸川委員長) では、審議をいたします。ご意見をお願いします。

(北村委員) 今回、全体的に生物多様性特別賞の記述欄への記載が少なかったことが残念でした。特に、生物多様性に関する活動をされているにも関わらず、書かれていない方が多かったと思いました。アピールの仕方によって、もっと候補になるところがあったように感じます。そもそも生物多様性への理解がまだ進んでいないという印象を受けたので、もっと理解を深めていただきたいと思いました。

(戸川委員長) 推薦した候補について、御意見があればお願いします。

(篠木委員) 私は、特定非営利活動法人茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会に票を入れさせていただきました。先ほどのプレゼンテーションでは、ザリガニの話ばかりでそれ以外の説明がありませんでしたが、応募用紙では、里山の保全、再生や調査など生物多様性に配慮した管理を行われているということが読み取れましたので、評価しました。先ほど、北村委員のご意見にもありましたが、ザリガニの事業についてだけではなく、その点についても、プレゼンテーションでアピールしていただきたかったと思います。特徴的な活動をアピールされるのはいいと思うのですが、それ以外にもきちんとアピールしていただけると、より評価しやすいと思いました。

(川崎委員) 環境活動の中でも、活動の性格として、生物多様性とは遠い活動と、まさにど真ん中の活動があると思います。候補を選ぶにあたり、まず、ど真ん中かどうかということ、それから、それについて実際何をされているか、また、それを意識されているか、という3つの要素がポイントになると思います。茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会の活動は、生態園ですから、テーマが生態系ですし、申請書からも意識をされていると感じました。確かにプレゼンテーションで、都市の中での生態園の役割について、もう少しアピールしていただければよかったですと思いますが、申請書主義ということで選びました。もう一つ重要だと思ったのは、活動をどこでやっているかということです。茅ヶ崎公園はニュータウンのかなり開発された場所にあります。駅の周りは里山などありそうもないのに、少し歩くとこの場所が残っているということで、希少性やこの場所でやっている意義を見出したいという思いもあり、推薦しました。

(為崎委員) 応募資料の活動の部分で、茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会は、生物多様性を目的にしているとはっきり書いていて、書き方もそこに集約する形で書かれているので、非常に分かりやすいと思いました。他の応募者は、結果として生物多様性になっている活動はいくつかあったのですが、比較すると、目標としているという点でアピール力が高かったということが、この結果になったと思います。次年度以降の課題として、結果として生物多様性につながっているということをどう拾っていくのかを考えていかなくてもいけないかもしれないと思

いました。しかし、その課題は別として、この団体は、調査、管理、再生と一貫してきちんと取り組まれていると思います、評価しました。

(山口委員) 活動は皆さんすばらしく、甲乙つけがたいのですが、横浜環境活動賞の生物多様性特別賞を取る方に、委員からのメッセージとして「これからも頑張っ
てほしい」ということを伝えたいと思いました。貴重な経験を積んで子どもたちが成長していくこと、卒業生が活動を通じて戻ってくることに、そのことに対して特別賞を与えてメッセージを送りたい、そのような気持ちで、私は推薦しました。

(磯崎委員) たくさんのイベントを通し、生物多様性の大切さ、豊かさを多くの人に伝えていて、特に、「めざせ！ザリガニマスター」は、仕組みがしっかりとして面白く、成果をあげていると思いました。子どもたちが楽しみながら、外来種のことや、身近な生き物について知ることができる素晴らしい取組だと思いましたので、茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会を推薦しました。

(戸川委員長) 評価基準について確認すると、「日々の活動やイベントなどを通じ、『生物多様性』を一般に、特に子どもたちに対し、広く伝えることに貢献しているか」という内容が、最初にきています。茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会のように、生物多様性を活動の目的にしているというのも当てはまりますし、横浜市立三ツ沢小学校のように、学校で、子どもたちに伝えているというのもまた、当てはまります。そこを我々がどう考えていくかというのが悩ましいと思います。というのも、三ツ沢小学校のプレゼンテーションによって、子どもたちのいきいきした顔が見えてきたのが、非常に良かったと思っており、迷っているところです。

(北村委員) 先ほどは、賞に関する全体的な話をさせていただきましたが、私の個人的な意見をお話しできなかったもので、ここでもう一度させていただきます。「該当者なし」としたのは、私です。今上がっている2つとも素晴らしいと思いますし、一般社団法人大岡川川の駅運営委員会も対象となると思っていました。ただ生物多様性については、もう少し結果が見えてきていたら、候補に推薦できたと思っています。茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会に関して言えば、すごくいろいろなことに取り組んでいるのは分かったのですが、最後に生物多様性についてアピールしているのがザリガニだったことに、期待が大きかった分がっかりしたところがあります。三ツ沢小学校については、山口委員のおっしゃるとおり、委員としてのメッセージというのは大切かもしれないと思いました。

(戸川委員長) それでは投票をお願いします。

<投票>

3 第24回横浜環境活動賞受賞候補者の決定

(戸川委員長) 受賞候補者の決定を行います。事務局は集計結果を報告してください。

(事務局) 採点結果を表示

(戸川委員長) 審査基準に基づき、15点以上の7者を実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に大賞候補です。審査基準により、点数が一番高い者が大賞候補となりますので、最高得点の特定非営利活動法人茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委

員会を大賞候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に企業の部の結果をお願いします。

(事務局) **採点結果を表示**

(戸川委員長) 3企業とも15点以上ですので、全て実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 大賞候補は、最高得点の株式会社よこはまグリーンピースとします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に、児童・生徒・学生の部の結果をお願いします。

(事務局) **採点結果を表示**

(戸川委員長) 2団体とも15点以上ですので、実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 大賞は最高点となっていますが、2団体の点数は同点です。この場合の候補の決定について、事務局から説明をお願いします。

(事務局) 同点団体に絞って委員で討議を行い、投票を行います。その結果、同票であれば横浜環境活動賞審査委員会運営要綱第4条第4項により、委員長の決するところとなります。受賞団体は1団体のみとなっています。

(戸川委員長) では、討議をお願いします。

(川崎委員) フェリス女学院大学エコキャンパス研究会は2年前に、実践賞を取られていたと思いますが、その時の大賞はどの団体だったのでしょうか。

(事務局) お手元の資料6の第22回の部分に記載されていますが、横浜市立大学環境ボランティア Step Up↑です。

(北村委員) 横浜市立大学環境ボランティア Step Up↑は、その前の年、第21回に実践賞を取り、再応募しての大賞受賞でした。

(為崎委員) 2年前の第22回の審査でも、横浜市立大学環境ボランティア Step Up↑とフェリス女学院大学エコキャンパス研究会について討議があり、エコキャンパス研究会は、もう少し頑張ってください次回にという話があったと思います。今回、前回の課題をきちんとクリアし、チャレンジいただいたということで、その点は評価したいと思います。ただ、三ツ沢小学校はプレゼンテーションの中で、子どもたちの姿勢、生き生きした活動の様子が伝わりました。今まで小学校は主体性が課題であったのに、今回は子どもたちに原動力があり、引っ張っているという印象があり、そこを評価したいという気持ちもあります。非常に悩ましいところです。

(篠木委員) 為崎委員のご発言と私も同じ気持ちです。フェリス女学院大学エコキャンパス研究会は多様な活動をなさっていて、課題をクリアしてきたところを評価すべきだと思います。しかし一方で、三ツ沢小学校ですが、私が一番驚いたのは、長期休暇にも子どもたちが学校に来て世話をしているということでした。子どもたちの自主性が評価できると思いました。

(戸川委員長) 投票をお願いします。

<投票>

(戸川委員長) では、投票結果の報告をお願いします。

	<p>(事務局) 投票の結果は、フェリス女学院大学エコキャンパス研究会が4票、横浜市立三ツ沢小学校が3票です。</p> <p>(戸川委員長) では、児童・生徒・学生の部の大賞候補は、フェリス女学院大学エコキャンパス研究会とします。</p> <p>(委員) 異議なし</p> <p>(北村委員) 制度上、実践賞と大賞という結果しか表に出ないと思いますが、今回の討議のことや、委員が大変悩んだということ、事務局から伝えていただきたいと思ひます。</p> <p>(川崎委員) 大賞でもおかしくない内容だったと思ひます。子どもたちが、自分たちの取組が実践賞に値した、大賞も近かったということを知り、活動の意義をもう一度意識して、そのうえで今後も取り組んでいただくと素晴らしいと思ひます。</p> <p>(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の集計結果をお願いします。</p> <p>(事務局) 特定非営利活動法人茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会が5票、横浜市立三ツ沢小学校が2票です。</p> <p>(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の候補は、特定非営利活動法人茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会とします。</p> <p>(委員) 異議なし</p> <p>(戸川委員長) これですべての審査を終了しました。何かご意見があればお願いします。ないようですので、以上で議事を終了します。事務局に戻します。</p> <p>(事務局) 委員並びに応募者の皆様に、ご連絡させていただきます。本日の会議録については、公表となります。後日、ご確認いただきますので、よろしくお願ひいたします。また、受賞者の皆様の応募書類につきましては、募集概要に記載しておりましたとおり、規約・定款、役員名簿、収支書類及び個人情報を除いて、ホームページに掲載させていただきます。ご了承くださいませよう、お願ひいたします。続いて、今後の予定について委員の皆様にお伝えします。お配りしました「第24回横浜環境活動賞今後の予定」をご覧ください。本日の審査委員会の審査をふまえ、市長が受賞者を決定します。応募者の皆様には、受賞者が決定しましたら、ご連絡させていただきます。また表彰式は6月14日(水)の午後に開催します。詳細については、別途ご連絡いたします。よろしくお願ひいたします。事務連絡は、以上です。</p> <p>審査委員の皆様並びに応募者の皆様には長時間にわたるプレゼンテーション及び審議をいただき、ありがとうございました。以上をもちまして、第24回横浜環境活動賞審査委員会を閉会いたします。長時間にわたり、ありがとうございました。</p>
資 料	<ol style="list-style-type: none"> 1 次第 2 資料1 横浜環境活動賞審査委員会 委員名簿 3 資料2 横浜環境活動賞実施要綱 4 資料3 横浜環境活動賞審査委員会運営要綱 5 資料4 審査基準 (市民の部/企業の部/児童・生徒・学生の部/特別賞) 6 資料5 応募者一覧 (プレゼンテーション 発表順)

7	(参考資料) これまでの受賞者一覧
---	-------------------